

青年期における描画力についての一考察

——本学学生の実態と授業の実践から——

宿 輪 忍 生

1 はじめに

14歳～20歳(青年期)は描画の発達段階¹⁾からいうと写実期に当り、視覚的にとらえた外界を写実的に描画、表現していく完成期といえる。長くこの時期に当たる学生の美術指導をしてきたが、描画力の個人差や美術が好きか嫌いによる意欲の差に非常に大きいものがあることに気づかされる。幼児期のなぐりがきに始まる描画活動は、知覚による絵(心象画)を中心として子どもの成長に応じて変化していく。幼児期から小学校低学年の子どもの絵についての研究や指導法の研究は多く、児童画というジャンルを形成している。写実前期(9歳～14歳)に当たる小学校高学年から中学生になると成長に応じて「もの」を客観視する力が芽生え、視覚による絵(写実画)が中心になってくる。一般にこの頃、現実と自己の能力とのズレに気が付き、苦手意識が生まれてくることが多い。まさにこの時期の指導が正しく行われるか否かが、のちの写実期(青年期)の描画力に大きくかかわってくると思われる。画家であり児童画の研究家でもある北川民次はこの時期(写実前期)について「真の写生とは視覚だけによる自然の模写ではなく、児童の初期に育てられた内部の世界と後から入ってくる外部の世界とが、矛盾を起こさずに合体するという作用の下に描かれなければならない²⁾」と述べている。矛盾を起こさず合体する指導が、個々の能力に応じて注意深く行われ、この時期の子どもたちは自然に写実期へ入っていかねばならない。しかし、本学新入学生にいきなり何も見ないで簡単な絵を描かせてみると、5～6歳児の図式的表現が多く見られ、又、対象を見て描かせてみても、小学校

や中学校で身につけたはずの描画力、表現力がほぼ抜け落ちていることに気づかされる。将来、幼稚園、小学校の教師を目指す本学学生の実態調査³⁾を行ってみると、73%の学生が高等学校で「美術」を全く選択しておらず、42%の学生が「美術」が嫌いと答えている。当然、多くの学生は自分の描画力と指導者としての能力に不安とコンプレックスを持っている。この学生たちが、2年後には幼稚園、小学校の指導者になるというサイクルのなかで、幼児から大学生に至るまでの美術教育の在り方の問題点が見えてくる。短い期間に彼女等の苦手意識をなくし、自信を持って子どもの絵の指導が出来るようになるにはどのような取組みが望ましいか、又、それが可能だろうか。次の方法で研究、考察し、今後の指導上の手がかりとしたい。

2 研究方法

- (1) 『友人を描く』授業の実践を行い、指導前と指導後の作品について比較検討して、描画力に関する問題点を調査する。
- (2) 1994年度、本学新入学生237名を対象に、「美術」に関する経験と意識の調査のアンケートと簡単な描画力テストを行い、実態を調査する。

以上の調査の結果にもとづいて、青年期における描画力、及び、美術教育の問題点について考察する。

3 授業の実践とその結果

- 課題 『友人を描く』 (1) 対象をよく見て生き生きした人物を描く。

- (2) 鉛筆によるデッサンに水彩絵具で着彩する。
- 課題設定の理由—— (1) 人物画は幼児期からずっと繰り返し描かれてきたモチーフであり、親しみがあって取上げやすい。
- (2) 描画力が顕著にあらわれる。
- 対 象 東京女子体育短期大学 児童教育学科
1年B-c 46名
- 日 時 1994年 5月 90分授業3回
- 場 所 美術室

- 第1回—— (1) 友人と向かい合って鉛筆でデッサンをする。
- (2) 何も指示せず自由に描かせる。(約30分)
- (3) ほぼできたところで基本的な人物の見方、とらえかた(プロポーション、バランス、角度、動勢)について説明をする。(約30分)
- (4) 再び新しい紙にデッサンをする。(約30分)
- 第2回—— (1) 着彩について説明をする。赤、青、黄、の三原色と藍色、白のみで混色して色をつくること、水をたっぷり使って透明感を生かすこと、白はなるべく使わないことを指示する。
- (2) 着彩をする。
- 第3回—— (1) 先週に続いて着彩をする。
- (2) 完成した作品に感想文をつけて提出する。

作品例(図1～図4)のうち、Aはいずれも、何の指示もなく、向かいあった友人を鉛筆でデッサンしたものである。中学校以来久し振りに絵を描いたという学生が73%もいるだけに自信なげな作品が多い。

BはAのデッサン後、プロポーション、バランス、角度、動勢など、人物を描くに当たって重要な点の指導を受けた後、再び同一人物をデッサンし水彩絵具で着彩して仕上げた作品である。図1のAは形もとれず頭部も出来ておらず、いかげんな感じのデッサンであるが、Bではいくらか改善され、少ししっかりした感じになったといえる。図2のAは目や鼻の表現が出来ず描ききれてなかったが、Bでは目や鼻のあたりに立体感をだそうとする努力がみられるが反面、首、肩、髪、襟の関係はまだよく理解出来ていない。図3のAは頭部がなく目、鼻が大きすぎてバランスが悪いが、Bでは全体と部分の関係が改善され、いくらか自然な感じになった。図4のAはプロポーションはほぼよく描けているが、Bではより人間らしい自然なポーズと表情が描けた。図5は着彩について何も指導を受けないうちに着彩したものである。顔も髪も一色、べったり塗られ全く陰影がなく平面的で堅い感じがする。目や鼻は線で一気に描かれ、日本画的表現である。図6～図8はクラス全体の内、水彩絵具の特性を良く理解し生かして表現出来た作品である。参考作品⁸⁾、図9～図10は中学2年生(14歳)の作品である。まだいくらか幼い表現がみられるが、視覚的イメージを表現する技術を獲得しつつある途上といえる。図11～図14は高校1年生(16歳)で美術を選択している生徒の作品である。美術が好き、あるいは得意な生徒の作品であり、確実に描画力を身につけ自信を持って表現している頼もしい作品である。この授業は別に目新しくも特別実験的でもない、ごく普通の中학생対象の授業とねらいも内容もほとんど同じといえる。ただ時間をたっぷりとり、一人一人個別に技術指導を丁寧に行った。特に久し振りに絵具を使う学生が多いことから、絵具の溶きかたや色の作りかた、筆の使いかたなど、基礎的な技術を指導した。三原色を指定したのは、顔は肌色、肌色は何色と何色で作るなどと固定概念で着彩することを防ぐためである。三原色のみでほとんどの色が作れること、水をたっぷり使い色の濃淡をいかしたり、重色して密度を出したりできることなどを体験させた。三原色で絵を描く松本キミ子⁴⁾方式は、今日では小学校などでも取入



図 1 - A

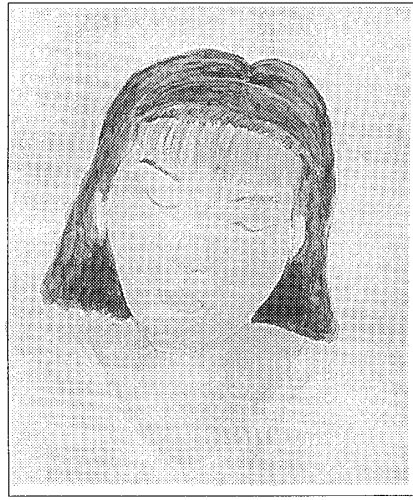


図 1 - B

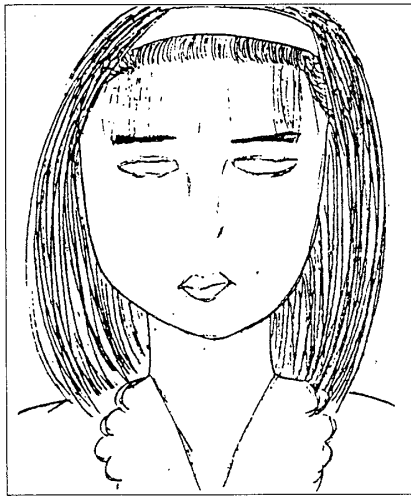


図 2 - A

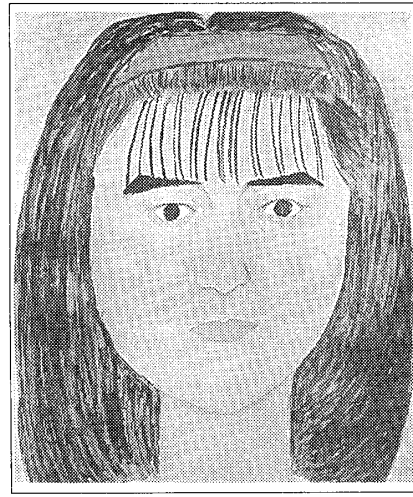


図 2 - B

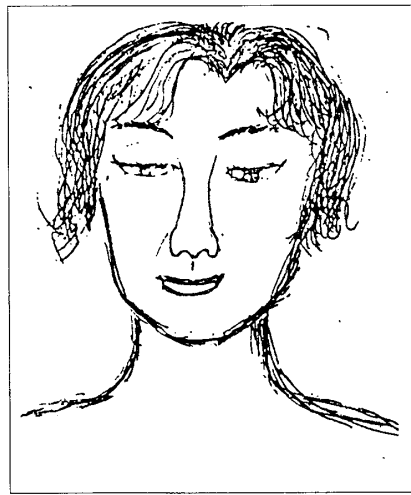


図 3 - A

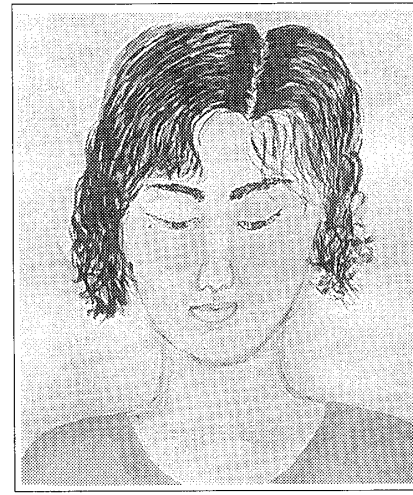


図 3 - B

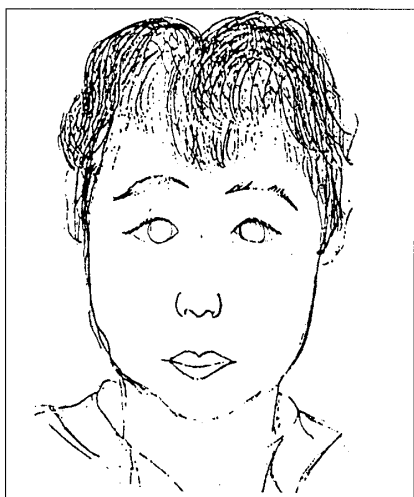


图 4 - A

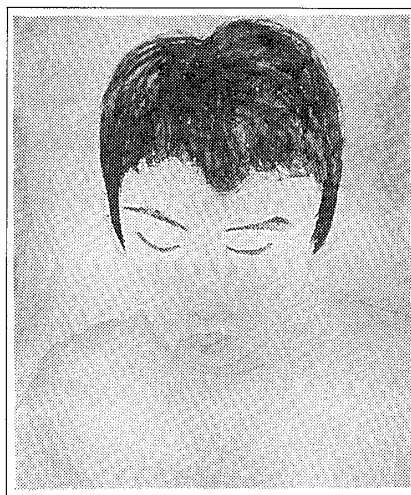


图 4 - B

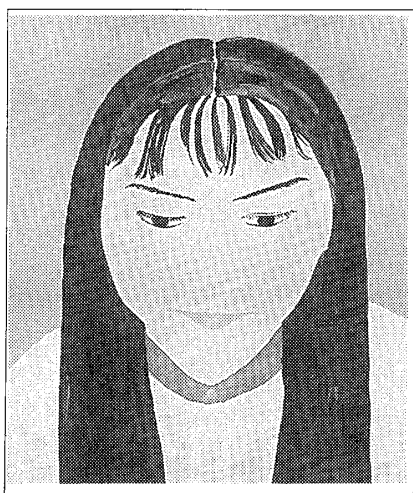


图 5



图 6

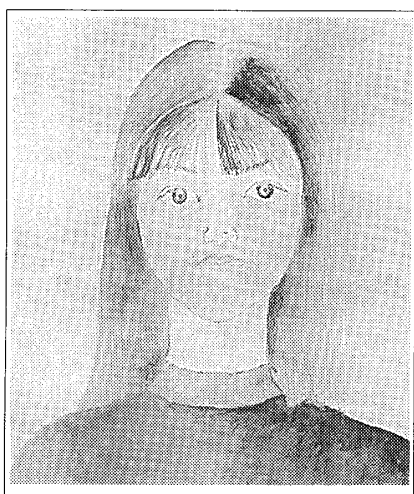


图 7



图 8



図9



図10



図11



図12

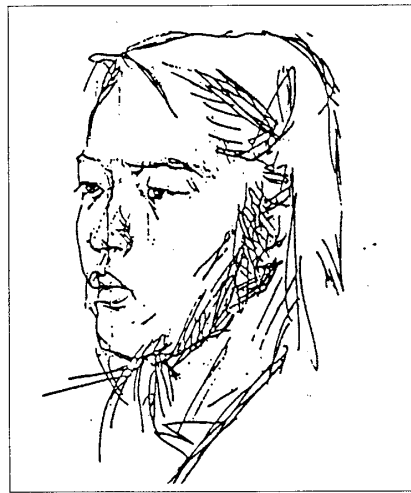


図13

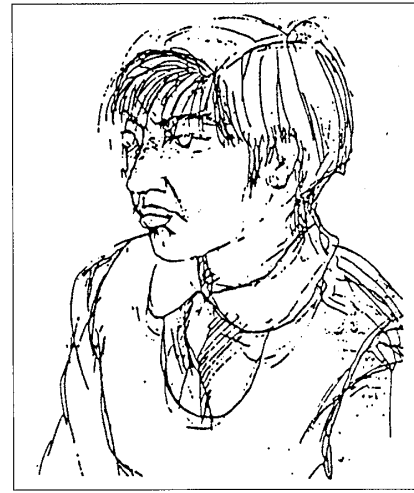


図14

れているところもあり、多くの成果を上げている。三原色とほんの少しの白、藍色、あとは水の量で水彩絵具は十分効果をあげることができる。授業後の感想ではほとんどの学生が、時間をかけてじっくり取り組んだことに対して充実感を述べ、個別的に技術指導を受けたことで自分にもこれだけ出来たという満足感を述べている。最初、いかげんな態度で臨んでいた学生も徐々に真剣になってゆき、最後は楽しかったという感想が多く得られた。又、初めて本格的に絵を描いたとか、水彩絵具の使い方が分かったという感想もあって驚いた。このことから『時間』と『技術指導』と『集中力』という3つの大切な要

素が浮かび上がってくる。いつも限られた時間内で不十分なまま、あわてて提出しなければならないようでは充実感は得られないし、技術指導は口頭で指示されるだけでは理解も納得も出来ない。集中力や真剣さは絵を描く上においても重要な態度である。新しい発見やうまくいったという実感を持つことで、絵を描くことは楽しいと思えるといえる。幼稚園から中学、又は高校までの美術教育のなかで、この3つが実現されていて楽しいという実感を持てればもっと成果は上がっていたのではないだろうか。このことから教科としての美術教育の在り方の問題点が見えてくる。

4 「美術」に関する実態調査とその結果

(1) 「美術」に関する経験と意識について

対象 東京女子体育短期大学 児童教育学科1
年生 237名

日時 1994年 4月

方法 アンケート方式による。

I 出身地

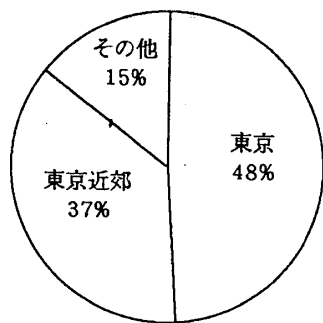


図-I 出身地

II 高校で「美術」を選択したか。

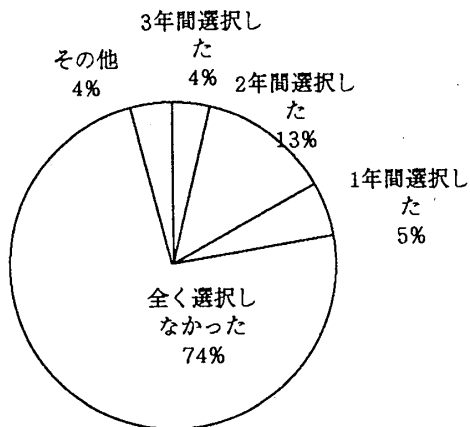


図-II 高校で「美術」を選択したか。

III 「美術」が好きか。

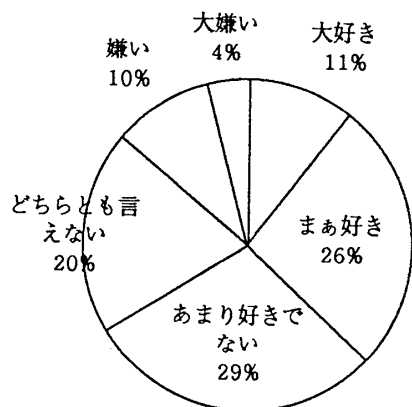


図-III 「美術」が好きか。

IV 好きな人はその理由

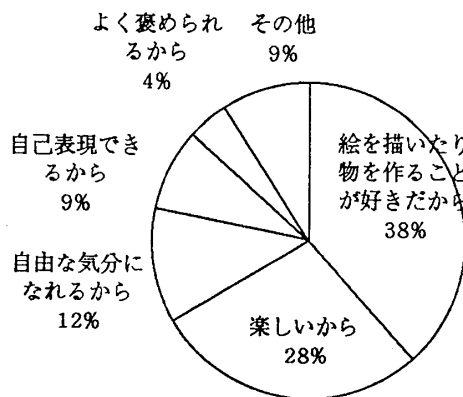


図-IV 好きな人はその理由

V 嫌いな人はその理由

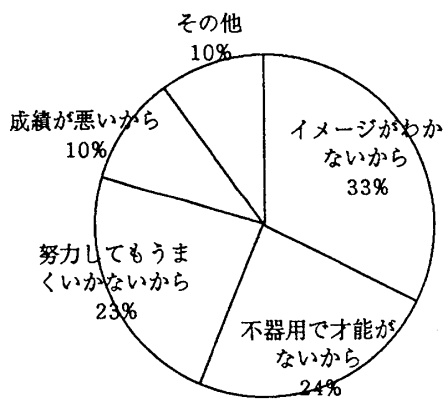


図-V 嫌いな人はその理由

VI いつ頃から嫌いになったか。

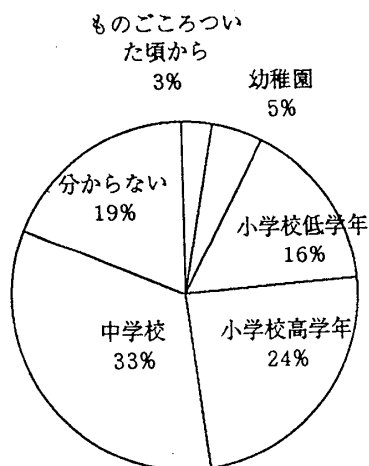


図-VI いつ頃から嫌いになったか。

VII 「美術」の好き嫌いが子どもの絵を指導していく上で影響あると思うか。

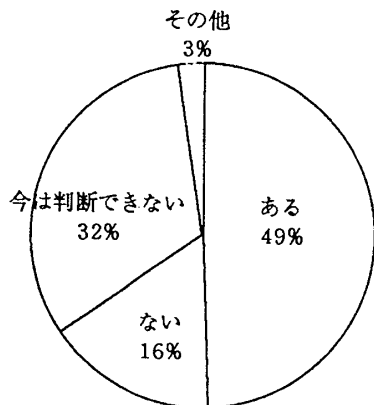


図-VII 美術の好き嫌いが子供の絵を指導していく上で影響あると思うか

アンケート用紙による質問はもっと多岐にわたったが、主な項目とその結果について図にしてみた。

「美術」という科目は絵を描くことだけではなく彫刻やデザインなどの内容も含み幅広いが、それら全部を含めての「美術」として問うた。問Ⅰの結果、東京及び東京近郊の出身者が多いということから、都会の学生についての調査といえる。問Ⅱの高校での「美術」の選択者は1年間だけ選択した、2年間だけ選択した、3年間選択した、の全部を合せてもわずか22%程度で、73%の学生が3年間全く美術を学んでいない。問Ⅲの好きか嫌いかでは、好きはほ

ぼ37%、嫌いは43%で嫌いが上回り、どちらともいえないも20%いる。問Ⅴの嫌いな理由は能力や才能に関するものが多く、下手だからという理由が多い。その他の理由では、教師の一言で嫌になったや、けなされて傷ついた、というものもあった。問Ⅵのいつ頃から嫌いになったかでは、年齢を追うごとに多くなり中学校でピークに達している。その結果、高校で選択しないことになったといえる。問Ⅶでは、ほぼ半数の学生が影響があると答えたが今はまだよく分らないが32%もいることから、学生にとっても大きな課題であると思われる。

(2) 描画力について

対象、日時は(1)に同じ

方法 I 立方体 II 走る人 を何も見ないで鉛筆で描かせる。

授業の実践対象クラス(B-c 46名中41名)について結果を簡単に分類してみた。

I 立方体

A 群 正方形を描いてそれに側面、上面を描いた者———23名

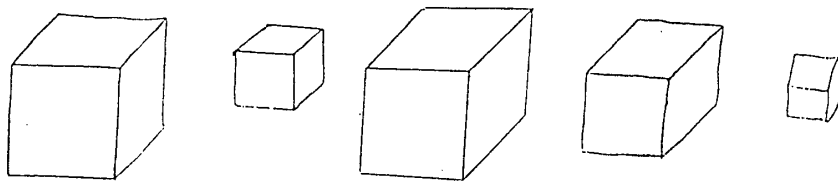


図1-A

B群 角度をつけて三面を描いた者——13名

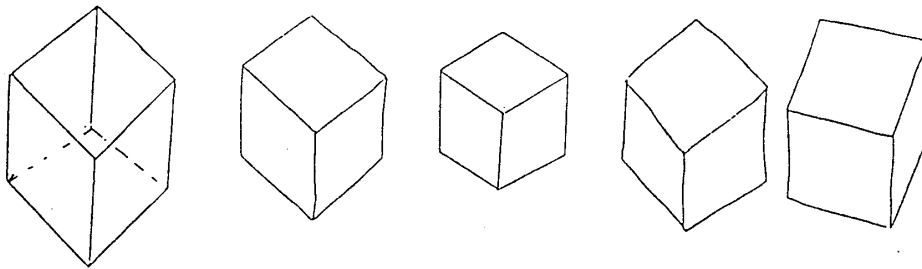


図1-B

C群 辺の長さが明らかに違って直方体を描いた者——5名

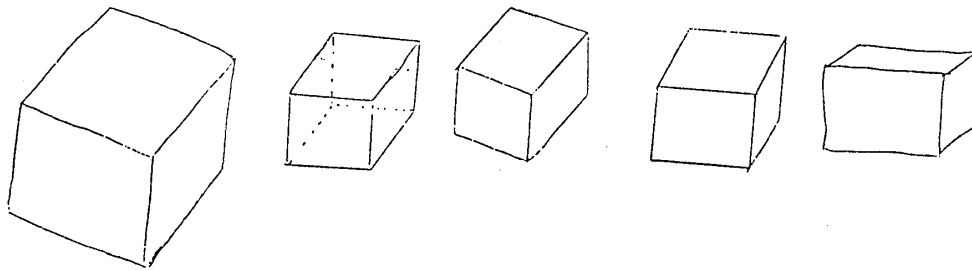


図1-C

この場合、寸法や視点を指定していないし、写生したわけでもないで、立方体のイメージを描いたものといえる。おおむね視覚的に立方体に見える、ほぼ立方体といえるものが描けた者は10名で、分かっている角度、視点、遠近法など、視覚的イメージを表現する具体的技術が分からないため、変な立方体になってしまった者が多かった。視覚的に厳密に言えば、A群のように見えることはありえない。

A群やB群の中でもどうみても直方体しか見えないものも多く、又、C群のように立方体そのものを誤解して、直方体を描いた者もいた。こんなに簡単な形（簡単なものほど難しいともいえる。）を表現するだけでも、基本的な事を理解していないと表現したいものに見えないものになってしまうし、どこかおかしいと思ってもどこをどう直せばいいのか分からないのである。

II 走る人

A 群 服を着て男か女など、具体的なイメージで描いた———11名

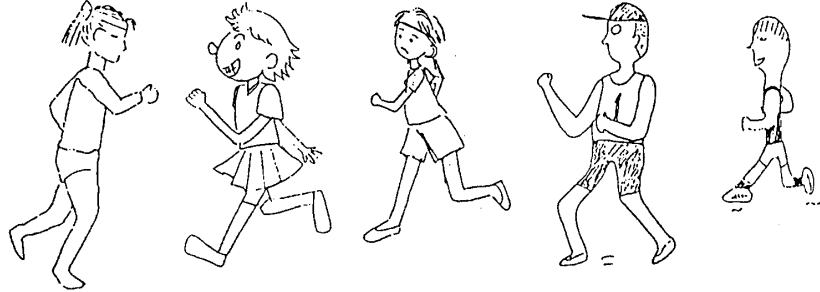


図 II - A

B 群 人間的肉付けはあるが、形だけのイメージで描いた———19名



図 II - B

C 群 丸と線だけで記号的に描いた———11名

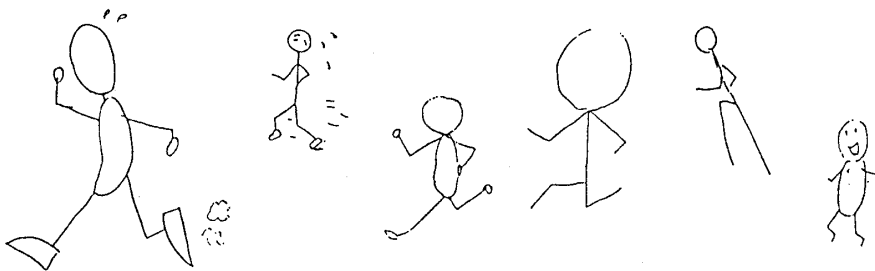


図 II - C

余りに多様な表現があり分類しづらいが、上のように、人間の表現の仕方でも分類してみた。『走る人』

というイメージを表現しようとするならば、『走る』という動作と『人』の具体的表現との両方が必要である

が、A, B, C群それぞれの人間の表現に『走る』動作が描けているものと描けてないものとがあった。

『走る』と『人』の両方のイメージがほぼ描けたといえる者は全体で5名いたが、プロポーションや角度がややおかしかったり、イラスト、漫画風だったりであった。また、汗を描いたりスピード感を出そうと線を描き加えたりしてる者も16名いた。C群のようにしか人間が表現できず、しかもプロポーションも動作も全くでたらめで描けてない者がこんなに多くいたことは問題である。B群中でも同じように描けてないものが多くあった。

5 考察

視覚的にとらえた三次元の世界を、平面である二次元上に表現するには、対象を認識し、見方、とらえ方を理解し、技術を獲得しなければならない。そのためには観察力、理解力、集中力などの知的能力が必要であり、それら総力を上げて取り組まねばならない。美術は単に感性や情操を養うばかりでなく、知的な教科なのである。蓮尾力氏が「視覚的概念を獲得していく試行錯誤の段階こそ、絵画教育の鍵に思われてならない⁵⁾」と述べているが、教科としての図画工作、美術の大きな役目の一つはまさにこの点にあると同感するものである。視覚的概念を獲得していく、言替えれば視覚的イメージを表現していく技術、すなわち視点の変化による奥行きや広がり見え方の変化（遠近法）や光と影による立体感の表現、プロポーションやバランスなどは、小学校高学年から少しずつ確実に指導されてゆき中学の3年間の段階でほぼ学習されなければならない義務教育の内容である。勿論それらは無味乾燥な技術のみの指導になってはいけませんが、感性や感覚による部分が多い美術の指導のなかで、具体的に教えられる部分であり、描けない疑問やその解決に力を貸すことが出来るのである。しかし、現実にはそのような表現力がついている学生は少なく、教科としての美術教育の目標が十分に達成されていない。その原因として次の4点が考えられる。

(1) 放任型、訓練型の教育

国語、算数、理科、社会、などの教科の幼児期から青年期にかけての段階的教育過程は完成されている。しかし美術教育——広く芸術教育——は余りにも特殊視するため、一番大事な時期に『放任型』『訓練型』の極端な指導になってしまうのではないだろうか。五教科を重視するあまり、美術を“遊び”や“息抜き”の時間にして、目標を達成しないまま放任していたり、あるいは一部の才能がある者のための特殊な教科にしてしまっているのではないだろうか。学校や現場の教師の考え方や姿勢の問題である。

(2) 社会的認識不足

美術を特殊視する、言い方を変えれば、生活と遊離したところに置き、社会的なかわりの意識が稀薄なのではないかと思われる。美術活動は生活の延長上にある社会の営みの一分野であって、芸術家だけのものではないということを指導者である大人が認識しなければならない。社会一般の認識不足は美術教育にとって大きな問題である。

(3) 子どもの環境

テレビ、漫画、ファミコンなど子どもたちは外で存分に遊ぶことなく室内で受身の遊びに夢中である。また、自然に親しみ感動するという体験が少なく自ら手を使ったり工夫したりすることも余りない。更に受験戦争は小学生の生活までおよび、塾通いもごく普通の生活の一部になっている。子どもの頃、育まれた豊かな内部の世界があつてこそ美術による人間形成の目的は可能と思われるが、美術教育以前の問題として、感受性や想像力が育ちにくい環境にあるといえる。学校教育や教科だけの問題ではない社会全体の状況の問題である。矛盾に満ちたこの状況の中で表現力を養うことはより困難になってきている。

(4) カリキュラム

美術の授業時間は中学校では1, 2年で2時間、3年で1時間、高校では選択科目になっている。少し描画力がついてきた頃、美術という教科から離れていかねばならない。特に中学校3年で1時間に減らされていることは大事な時期であるだけ残念な点である。「学習指導要領」の内容は豊富で立派だが、生

徒にとって十分な時間があるとはいえず、果たしてどれほど教科の目的が達成されているか疑問である。

以上の問題点をそれぞれ更に深く研究して、美術教育が人間形成にとって不可欠な大事な教科であると認識し、教育目標を達成させなければならない。

6 まとめ

絵が描けない学生の指導体験の中から、これまでに感じてきた疑問、問題点をまとめてみた。美術は単に描画力だけでなくもっと多くの内容を持っていることを十分承知の上で、絵を描く能力を美術の原点としてとらえ、特に描画力のみについて考えてみた。描画の発達段階はローウェンフェルドの研究をもとにした、日本で一般に用いられている六段階説にそって考えてみた。ローウェンフェルドのいう青年期は13歳～17歳だが、ここでは14歳～20歳と幅を広げ、学生をこの時期に入れた。青年期の美術についてローウェンフェルドは「児童期のように明瞭な考えの段階に達してなく、今日、世界共通の課題と考えられている。⁶⁾」とこの時期の美術教育の研究が十分でないことを指摘し、「青年が自己表現の無意識な子どもらしい制作の方法を持たず、また意識的な方法も持たないこの時期は、時として自信の一切を揺るがす非常に深い危機によって特徴をつけられる。⁶⁾」と述べ、青年の危機——決定の時間——としている。また描画の意図が無意識的なものから意識的自覚的なものに変化する過渡期を「一種の断絶」とする考え方⁶⁾もあり、絵画教育の見直しも試論されている。危機や断絶とかなり前から言われているにもかかわらず、この時期（写実前期～写実期）の美術教育の成果は上がっているとはいえない。井手則雄氏は国立の教育大学の入学試験で表現力テストとして絵を

描かせた結果について「自由な放任教育の成れの果て⁷⁾」と嘆いていたが、教員養成大学の共通の現状であり悩みであろう。しかし今回の授業で学生の「絵が上手になりたい」という切実な気持ちや、真剣に取り組んだ結果として達成感を持った様子など、手ごたえを感じる事ができた。指導者になる彼等にとっては、自らがこの達成感を実感として知った上で、子どもの身になって指導でき、子どもとともに表現活動を楽しむことが大切であろう。そのためにも美術が楽しいと思え、苦手意識をなくすことが先決である。生徒、学生の学びたいという意欲と教師の熱意の一体化はいつの時期においても最も大事な要素だろうと思われる。本研究は学生の実態を調査し問題点を上げるに止まったが、本研究をもとに指導法を研究して授業の改善に努めたい。

引用・参考文献

- 1) 久田純 他編 「造形を中心とした表現」 東洋館出版 1992年 P. 11
- 2) 北川民次 「子どもの絵と教育」 創元社 1976年 P. 122
- 3) 本文 4 「美術」に関する実態調査とその結果
- 4) 松本キミ子・堀江晴美 「三原色の絵の具箱」 ほるぷ出版 1983年
- 5) 蓮尾力 「公教育における絵画指導の見直しと新たな展開」1990年『東京学芸大学紀要 NO.42』 P. 44～46
- 6) V. ローウェンフェルド 「美術による人間形成」 1980年 P. 347 327 黎明書房
- 7) 井手則雄 「美術教育入門・理論編」1983年 P. 19 百合出版
- 8) 参考作品 O 女子中学、高校の生徒作品